

補異称日本伝の研究

——異称日本伝の類書続編の研究(六)——

石原道博

目次

- 一 東大本補異称日本伝の体裁
- 二 第一冊(卷一・二)の項目と引書
- 三 第二冊(卷三・四)の項目と引書
- 四 第三冊(卷五・六)の項目と引書
- 五 第四冊(卷七・八)の項目と引書
- 六 第五冊(卷九・十)の項目と引書
- 七 小 結

一 東大本補異称日本伝の体裁

東京大学図書館本の補異称日本伝(小宮山昌秀撰)は、五冊十巻。各冊各二巻をおさめる。写本、袋綴、無野。半葉一〇行、行二〇字(註1)。

補異称日本伝の研究——石原

小宮山昌秀（一七六四—一八四〇）は昌嶠（桂軒）の孫。名は昌秀、字は子実、号は楓軒。立原東里（翠軒）にまなび、天明三年（一七八三）に彰考館員となつて水戸藩につかえ、農政家・史学者として治績をあげた古注学派の人。著述は七十種にちかい。近世漢字著述目録集成には、かれの著述として「異称日本伝補遺一巻」をあげているが、ここに紹介する「補異称日本伝十巻」とはちがうようである。ただし、別稿でのべたが、撰者不詳の異称日本伝補遺一巻というのは、おそらくかれの撰であろう（註2）。

つきに、補異称日本伝の体裁をまず紹介しておく。

第一冊は巻一・巻二である。巻一は五十一葉、巻二は四十二葉、計九十三葉。第一冊の開巻第一葉に「補異称日本伝」と題するが、その右に小さく「此書重テ整理類聚スヘシ／国号 地理 風俗 人物 器財／動植 聘使 戦闘 僧尼 文芸／書信」と加筆してあるのが、まず注目をひく。これは、本写本の旧蔵者萩野由之博士の筆と推定されるが、これらについては、いづれ全冊を検討したうえで、ふたたび論及するであろう。

第二葉には、右上に三字三行「佐度萩野邇之図書記」の押印があるが、「邇」は「由」である。ここには「補異称日本伝遺料」として

予嘗在史局也、考国史遺漏於外史、得之者不／尠焉。祭酒林先生本朝外攷、見林松下翁異称／日本伝、可以当洪壁也。二君用意之深厚、可嘉／尚焉。自後舶来書尤多。予雖固陋、竊欲繼三子／之志、補其遺者、有年于此。随見即録、頗成其緒／也。惜哉其稿罹丁卯之火、皆烏有矣。今敢廢／焉、再有此舉。嗚呼似醜女之效顰者哉。

文化五年戊辰二月

楓軒小宮山昌秀識

追考本朝外史、宣作国史、外考

とある。これは、昌秀が本書編集の目的と経緯をのべたもの。祭酒林先生（林恕・春齋）の本朝外攷、松下見林の異

称日本伝の遺を補うことを目的とし、「自後舶来書」も参看して集録していたが、丁卯(文化四年(一八〇七))の火事で烏有に帰し、ふたたび集録したもののようである。この間、一年余。文化五年戊辰(一八〇八)は、中国では清の嘉慶十三年にあたる。

おわりに「追考本朝外史。宜作国史外考」とあるが、識語には、本朝外史とある。史と攷の誤記ともとれるが、わたくしの前稿にみられるとおり、国史外考(攷)と本朝外考(攷)とは別書であり、このところ、昌秀の見解に混乱があるようである(註3)。なお、本書名のことであるが、ここでは「補異称日本伝遺料」とかかれており、卷二以下のそれぞれ本文冒頭にしるす書名も、「補異称日本伝」とはみえず、多少の出入をしめしている。このことも、あらかじめ指摘しておく。

因みに、本書の特徴は、引用書別の配列ではなくて、引用項目別の配列になっていることである。

二 第一冊(卷一・卷二)の項目と引書

第一冊卷一の本文にはいる。「引用項目」とかいてはないが、はじめに、つぎの六十六(七十一)項を列記する。

(ナンバー、ABCDEは石原加筆)

1 倭 A倭奴 B女王国	2 日 本	3 沃 沮
4 鞅 鞅	5 舞 女	6 海 路
7 松	8 僧 定心	9 長 崎
10 弥 耶 穀	11 上 将 軍	12 世 官 世 禄
13 街 官	14 毯 踏 棉	15 髡 鬚 薙 頂

- | | | |
|----------|----------------------|----------|
| 16 覆 姓 | 17 徐家村 | 18 尚僧敬祖先 |
| 19 割肚自殺 | 20 朝鮮琉球貢 | 21 鄭芝竜 |
| 22 大東洋 | 23 冷暖玉 | 24 南浦知客 |
| 25 販 海 | 26 阮一鶚 | 27 誘 寇 |
| 28 北虜南倭 | 29 岫 強 | 30 絶 貢 |
| 31 琉球臣服 | 32 劉炳文 | 33 日出天子 |
| 34 戚継光 | 35 仙香 c 返魂 | 36 画 |
| 37 絲 糖 | 38 竜芯簪 | 39 神像動 |
| 40 土官妻瓦氏 | 41 林兆恩 | 42 紀武内 |
| 43 茶 | 44 医知気丹波氏 | 45 灑 金 |
| 46 漆 | 47 別紅雷皿 D 軟屏風 E 鳥嘴木銃 | 48 螺 慎。雷 |
| 49 扶桑樹 | 50 美人 | 51 解倭人 |
| 52 平秀吉 | 53 煙 艸 | 54 光 餅 |
| 55 宗 臣 | 56 台 湾 | 57 帰一王 |
| 58 郭懷一 | 59 豊臣書 | 60 鄭成功 |
| 61 幻空法師 | 62 任公環 | 63 孝経孔伝 |
| 64 平重盛 | 65 寿安鎮国山 | 66 阿蘇山 |

つぎに、じつさいの引用項目をみる。たとえば、1をみると、はじめに「倭A倭奴」として、1前漢書、2後漢書

(光武紀をふくむ)から原文を引用し、これに「源之熙按」として按文をのせる。つぎに、3 魏志から原文を引用しこれに「熙按」として按文をのせる。つぎに、4 明世法録、5 唐書から原文を引用し、これに「谷川士清曰」「秀(昌秀)按」として按文をのせる。おわりに、6 品字箋・倭字から原文を引用する。そして各引用文に頭註(小見出し)して、倭人・大倭王・倭奴国・倭国王・倭奴国王・倭・B女王国・倭国・以倭為号・古倭奴国などとしるしてゐる。

これによれば、日本関係の中国書六種から原文を引用し、必要に応じて、日本の学者や編者昌秀の按文をくわえ、引用文には小見出しをつけるなど、きわめて良心的・学術的な配慮がなされている。

因みに、本稿では、紙数の関係上、本書の内容にふかくたちいつて精査熟考、比較検討する紙幅がない。いまは、いちおう引用項目と引用書について通観することとした。具体的な諸問題については、別稿で詳説したい。

さて、右に準じて、引用項目と引用書を整理すると、ほぼつぎのようになる(引用書のナンバーも石原加筆、*印は重出)。

1 倭A倭奴〔B女王国〕 1 前漢書 2 後漢書 3 魏志 4 明世法録 5 〔旧〕唐書 6 品字箋(按文―源之熙・谷川士清・小宮山昌秀)

2 日本 * 5 劉昫〔旧〕唐書 7 蓬窓日録(按文―源之熙・藤〔井〕貞幹・蘭林、元元集)

3 沃沮 * 2 後漢書東夷伝(按文―秋苑日涉・昌秀)

〔4 鞮鞞〕 5 舞女 * 5 〔旧〕唐書北狄伝(按文―秋苑日涉)

〔6 海路〕 8 輟耕録

〔7松〕 9 汴故宮記

〔8僧定心〕 10 癸辛雜識〔註4〕

〔9長崎〕 10 弥耶穀 11 上將軍 12 世官世祿 13 街官 14 毯踏棉 15 髻鬚雜頂 16 覆王 17 徐家村 18 尚僧敬祖先

19 割肚自殺 20 朝鮮琉球貢 11 海國聞見錄・東洋記

〔21鄭芝竜〕 * 11 海國聞見錄・東南洋記

〔22大東洋〕 * 11 海國聞見錄・大西洋記

23 冷暖玉 12 杜陽雜編

〔24南浦知客〕 13 虛堂錄七〔按文―扶桑僧宝伝・芝屋隨筆〕

〔25販海〕 26 阮一鸚 27 誘寇 28 北虜南倭 29 崛起 30 絶貢 31 琉球臣服 32 劉炳文 33 日出天子 34 戚繼光〔註5〕

35 仙香C返魂 36 (日本)画 37 絲糖 38 竜芯簪 39 神像動 40 土官妻瓦氏 41 林兆恩 42 紀武内

14 五雜組。(組)卷四・五・七・八・一〇・一一・一二・一五〔按文―昌秀〕 15 氏族大全序

〔43茶〕 16 西齋詩話・酒茶論〔按文―秋苑日涉〕

〔44医和氣丹波氏〕 17 神心経〔按文―秋苑日涉〕

〔45灑金〕 46 漆 D 軟屏風 E 鳥嘴木銃 18 七修統稿四十五〔按文―昌秀〕

47 剔紅罌皿 19 格古要論

48 螺填。器 20 泊宅編〔按文―秋苑日涉〕

〔49扶桑樹〕 21 閩書南產志〔按文―南溪〕

50 (日本)美人 22 鉄網珊瑚

〔51 解倭人〕 23 医賸

〔52 平秀吉〕 24 隱峰野史別録（朝鮮書）

53 煙艸（出倭国） 25 芝峰類説（朝鮮書） 26 医意商 27 漳州府志（按文―震軒・目さまし草）

〔54 光餅〕 28 榕城詩話（註6）

55 宗臣 29 明史文苑伝（柯維祺・茅坤もみえる）

〔56 台湾〕 57 婦一王 58 郭懷一 60 鄭成功 59 豊臣書 30 香祖筆記（按文―桂林漫録・昌秀）

〔61 幻空法師〕 62 任（公）環 31 猗園（按文―昌秀）

63 孝経孔伝 32 簡明目録 33 經典釈文序録攷証 34 十七史商榷

〔64 平重盛〕 35 宋史四九一・日本（按文―兵家茶話・編年集成）

65 寿安鎮国山〔66 阿蘇山〕 36 〔天下〕郡国利病書六三・浙江省五 37 日本考略 38 名山蔵（按文―中陵漫録・

秉燭譚）（註7）

以上が巻一であるが、目次の引用項目と本文の引用項目とは、表題のないもの（カッコハ）つきのもの（カ）が多く、いきなり引用書をかかっている。引用書は三十八部、うち朝鮮書は24・25の二部。

巻二は、はじめに本書名「補異称日本伝」とはみえず、「修異称日本伝補料第二」とあるのが注目される。そして巻一と同じように、引用項目を列記する（ナンバーは巻一からの通し、※印は前出のナンバー、石原加筆）。

67 文 身 68 衣無縫綴 69 女王俾弥呼

70 属帯方郡 71 拍手 72 明霞錦

73 貢麒麟

74 伯之後

75 扶桑國

76 朴堤

77 金桃

78 紙

79 咏西湖詩

80 金銀

81 車

82 金剛山

83 吳禎

84 胡惟庸

85 湯和

86 劉榮

87 焦宏

88 朱執

89 王忬

90 張經

91 趙文華

92 胡宗憲

93 俞大猷

※34 戚繼光(前出・卷一)

94 嚴世蕃

95 陷朝鮮

96 趙志皋

97 嗜哩嘛哈

98 鳥銳(銃)

99 回々教

100 暹羅

101 琉球舜天

102 孟子

※63 孝經孔伝(前出・卷一)

103 七経孟子考文

104 論語義疏

すなわち、引用項目は67と104の三十八(四十)である。※印3463の二項目は卷一、前出。ナンバーは初出のものをもちいた(以下、同じ)。

つぎに、本文の引用書にうつる。引用書のナンバーも巻一からの通し、前出は*印。初出のナンバーをもちいた。

(以下同じ)

67 文身 *2 後漢書倭人伝(前出、卷二)〔按文〕〔昌〕秀・藤〔井〕貞幹・本居宣長

68 衣無縫綴 *2 後漢書 *3 魏志(前出、卷二)〔按文〕藤貞幹、本居宣長・源君美||新井白石

〔69 女王俾〕(卑) 称呼 70 属带方郡 * 3 三国志魏志齐王芳纪・東夷伝(前出、卷二)

71 拍手 * 3 魏志倭人伝(按文―藤貞幹・盍簪餘録、〔昌〕秀)

〔72 明霞錦〕 * 12 杜陽雜編(前出、卷二) (按文―源君美)

〔73 貢麒麟〕 39 韻府統編

74 大伯之後 40 晋書倭人伝(按文―本居宣長、神皇正統記) * 3 魏志(按文―松下見林) 41 梁書 42 西朝平攘

録(按文―兩山學談、裊文彙編)

75 扶桑国 * 41 梁書(前出、卷二) 43 南史(按文―本居宣長) 44 霏屑集 45 海内十洲記(按文―中良虞臣)

46 西陽雜俎

〔76 朴堤〕 (引書名なく、本文のみ)

〔77 金桃〕 47 述異記(梁・任昉)

78 紙 48 撫異記(唐・李潛) * 19 格古要論(前出、卷二)

〔79 咏西湖詩〕 * 7 蓬窓日録(前出、卷二) 49 堅瓠七集

〔80 金銀〕 * 5 宋史日本伝(前出、卷二) (按文―近藤守重、〔昌〕秀) * 42 平攘録(按文―近藤守重) 50 塩

邑志林(按文―近藤守重) 51 篇海類編・珍宝部外夷語(按文―近藤守重)

〔81 車〕 52 統弘簡録・高麗 * 7 蓬窓日録(前出、卷一・二) (按文―文昌雜録)

82 金剛山 53 花(華) 蔽経(按文―神皇正統記、松下見林)

〔83 吳禎〕 84 胡惟庸 85 湯和 86 劉采 87 焦宏 88 朱紘 89 王杼 90 張経 91 趙文華 92 胡宗憲 93 俞大猷 ※ 34 戚

継光 94 敵世蕃 95 陷朝鮮 96 趙志學 54 綱目三編・明紀

〔97 嗜哩嘛哈〕 * 49 堅瓠秘(五)集(前出、卷二) 55 遵聞錄 56 神史彙編(註8)

98' 鳥槍 57 該餘叢考 58 泰西水法

98 鳥銃 59 神器譜(按文―〔昌〕秀)

99 回々教 (按文―采覽異言)

100 暹羅請剿倭 60 統文獻通考

101 琉球舜天 * 52 統弘簡錄(前出、卷二) (按文―本居宣長・〔昌〕秀、源君美)

102 孟子 * 14 五雜俎(前出、卷二) 61 武備志(按文―桂林漫錄、康富記、谷川士清)

※ 63 古文孝經孔子伝(前出、卷一) * 32 四庫全書簡明目録(前出、卷一)

103 七経孟子考文補遺 * 32 四庫全書簡明目録(前出、卷一) 63 刻七経孟子考文並補遺序(清・阮元)

104 論語義疏 * 32 四庫全書簡明目録(前出、卷一) 62 知不足齋叢書第七集

以上、引用項目が目次にはないが、本文では98'鳥槍がくわわっている。引用書は、巻一前出*印の 2 3 12 19 7 5 14
32の八部があり、巻二新出のものは39、63の二十五部、計三十三部。このうち、*印41 42 49 52の四部は巻二再出。

三 第二冊(卷三・四)の項目と引書

第二冊は卷三・巻四である。第一冊とおなじく半葉一〇行・行二〇字。巻三は四十九葉、巻四は三十八葉、計八十七葉である。

巻三は、はじめに「修異称日本伝料第三」とあり、巻二のように補料とはない。引用項目が列記してあるから、ま

ずそれをかかげておく。

105 始見正史

106 倭作倭

107 州郡

108 真本尚書

109 使人請文 A 得書為珍

110 求通表文

111 書幅拭穢

112 陳宜中

113 沈惟敬

114 源道義

115 王良懷

116 張君房

117 一夜松

118 八角垂芒

119 九夷

120 大内殿 B 迎鳥 C 細鳥

121 画牛鬻草

122 竹島

※ 65 寿安鎮国山(前出、卷一)

125 聚扇

126 繭

127 桜花

128 軟刀

129 無馬

130 匣煙

131 新羅松 D 羅木

132 菊

※ 38 竜芯簪(前出、卷一)

133 水品

134 炉

135 曲水宴 E 放生会

136 折丹術

137 再求算書

138 元船覆溺

139 美海 F 朴沙覽 G 金堤上

140 延鳥郎 H 細鳥女

141 蝦夷

右のように、105~141の三十九項目であり、※印前出は65、38の二項目。A~Hの八項目は、すでに第一冊でみたよう

に、副次的項目として、やや小さくかかれている。つきに、目次と対照しながら、本文を検討してゆきたい。

105 始見於正史 * 1 [前] 漢書地理志燕地(前出、卷一) (按文―伊藤長胤)

106 倭作倭 63 周礼(按文―源君美) 64 北史 65 隋書

107 州郡 66 太平通載 (按文—青木敦書) * 21 閩書卷一四六島夷志 (前出、卷二) (* 38 名山藏と同文) * 35 宋

史日本伝 (前出、卷二) * 42 兩朝平攘録 (前出、卷二) 67 圖書編 68 日本志 (王世貞)

108 真本尚書 69 聽雨紀談 (明・都穆) 70 西河合集 (清・毛奇齡)

109 日本使請文 71 先進遺風

A 得書為珍 * 38 名山藏芸妙記 (前出、卷二)

110 求通表文 72 翦勝野文 * 38 名山藏 73 明志 74 劉氏鴻書 (按文—〔昌〕秀) (註9)

111 書幅拭穢 75 甲乙剩言 (按文—伊藤長胤・藤原明遠・千慮一得)

112 陳宜中 76 草木子 (按文—伊藤長胤) (註10)

113 沈惟敬 * 75 甲乙剩言 (前出、卷三) (按文—林道春)

114 源道義 77 皇明通紀 78 草廬雜談 * 38 名山藏 (前出、卷二) (按文—善隣國寶記、康富記、〔昌〕秀)

115 〔王〕良懷 * 77 皇明通紀 (按文—松下見林、秉燭譚) * 38 名山藏 (前出、卷二)

116 張君房 79 麗藻 80 群談探餘 81 宋朝類苑六三

〔117〕一夜松 82 夢觀集 83 薩天錫雜詩妙選稿全集 (參考—菅神和光伝、神社考)

118 八角垂芒 84 日東曲 (明・宋景濂) * 65 隋〔書〕經籍志 (前出、卷三) (按文—伊藤長胤)

119 九夷 85 爾雅 (按文—伊藤長胤)

120 大内殿〔B迎鳥 C細鳥〕 86 筆苑雜記卷二 (朝鮮・徐居正) 87 慕齋 (齋) 集 (朝鮮・金安国) 88 海東諸国記

(朝鮮・申叔舟)

121 画牛鬣草 89 蓼花洲間録 (宋・高文虎) (參考—焦氏類林三・宋神類抄卷五)

127 竹島 * 64 北史倭伝(前出、卷二) (按文—青木敦書・伊藤長胤)

※ 65 寿安鎮国山(前出、卷二) 90 殊域周咨錄 91 月令広義(註11) (按文—藤貞幹、正字通・西遊記)

123 日本武藏州詞 92 宦曆漫記(余寅僧果撰) 93 日本風土記

124 唐順之 94 新知録(明・劉仕義)

125 紫扇 95 蓬窓続録(呉郡馮時可) 96 癸辛雜識続集 * 81 宋朝類苑(前出、卷三)

126 繭紙 97 韓文註(参考—名山藏手簡、按文—前田時棟・安積寛)

127 桜花 98 日本雜咏(沙起雲) 99 蕭鳴草(道本) (按文—亀田興・〔昌〕秀)

128 倭。軟刀 100 徐氏筆精(按文—青木敦書)

129 無馬 * 2 後漢書倭人伝(魏志同文) (前出、卷二) (註12) (按文—青木敦書、〔昌〕秀は欠)

130 匣煙 101 浙海鈔関則例(按文—青木敦書)

131 新羅松 D 羅木 * 癸辛雜識(前出、卷二) (参考—東雅注、按文—〔昌〕秀)

132 倭。D 倭青草 102 菊譜(宋、劉蒙) (参考—東雅注、按文—松下見林) 103 空明子詩集卷六

※ 38 竜芯簪(前出、卷二) 104 玉芝堂談薈

133 水晶 105 訳史紀餘(按文—亀田興・木内政章) 106 本草原始八 107 通雅

134 倭。炉 108 遵生八牋(按文—青木敦書)

135 曲水宴 E 放生会 109 文献通考

136 折丹術 110 山海経 * 107 通雅(前出、卷三)

137 冉求算書 111 隨園尺牘(按文—亀田興)

補異称日本伝の研究—石原

138 元胎覆溺 * 96 癸辛雜識續集(前出、卷三)

139 美海 F 朴姿、覽 G 金堤上 112 三国遺事卷一 113 三国史〔記〕?

140 延鳥郎 H 細鳥女 * 112 三国遺事 114 東国通鑑(* 120 C 細鳥、参照)

140' 元聖大王 * 113 三国史〔記〕?

141 蝦夷 * 109 文献通考(前出、卷三) * 5 唐書(前出、卷二) (按文―松下見林・近藤守重・〔昌〕秀)

以上、目次と本文の項目をくらべてみると、目次にはないものは140の一項目、項目名に出入あるものは105 109 115 139の四項目。引用書は、新出のものは63~114の五十二部、うち朝鮮書は66 112 113 114の四部、日本書は78 (青木敦書著)の一部である。

巻四は、はじめに「修補、異称日本伝料、第四」とあり、巻一の「補、異称日本伝遺料」、巻二の「修、異称日本伝補料」、巻三の「修、異称日本伝料」と、それぞれ一、二の出入がある。巻三とおなじく、引用項目をしるす。

142 和歌弥多弗利

143 邪人(久) 国 144 高階真人

145 昆 布

146 李 洞詩 147 安 覚

148 両刀併佩

* 73 冷暖玉(前出、巻二) 149 倭 志

150 倭 変録

151 漂 海録 152 航海侵掠 A 仏郎機

153 袁了凡与清正接鋒

154 沈安頓吾 B 石曼子 155 小 西 飛

156 秀吉濫刑

157 侵掠三韓 158 援韓餉銀

159 甲 叟州

160 粥 杖 161 翁鳴岐立票

162 鳥東家

163 正平板論語集解

164 倭綴

165 見林編録書目 異称日本伝ノ引用書目ナリ、今省ク

すなわち、引用項目は142と165の二十五項目、副は152 A・154 Bの二項目、計二十七項目。前出※印は23の一項目、計二十八項目。つきに、本文と比較してたしかめてゆこう。

142 和歌弥多弗利 * 64 北史倭伝(前出、卷三) (按文—藤〔井〕貞幹・〔昌〕秀)

143 邪久国 * 52 続弘簡録琉球伝(前出、卷二) (按文—伊藤長胤・源君美)

144 高階真人 * 5 唐書(前出、卷二) (参考—朝野群載・盍簪録)

145 昆布 * 5 唐書渤海伝(按文—安積寛・佐藤成裕)

〔146 李洞詩〕 * 7 蓬窓日録(前出、卷一)

147 安覚 115 鶴林玉露(参考—皇華殊域録)

148 両刀併佩 * 88 海東諸国記(前出、卷三)

※ 23 冷暖玉(前出、卷一) 116 八紘〔釋〕史(参考—西遊記)

149 倭志 117 弁州史料(註13)

150 倭変録 118 霞亭涉筆 119 觚不觚録

151 漂海録 120 漂海録(朝鮮・崔溥)

152 航海侵掠 121 広治平略(清・蔡方炳) * 67 図書編(前出、卷三)

A 仏郎機 * 42 両朝平壤録(前出、卷二)

153 袁了凡与清正接鋒 122 武備要略(袁黄)

- 154 沈安頓吾 B石曼子 123 懲忠録（按文―伊藤長胤・〔昌〕秀・林道春）
- 155 小西飛 124 皇明実紀 * 42 兩朝平攘録（前出、卷二） * 67 図書編（前出、卷三） * 61 武備志（前出、卷二）（按文―伊藤長胤・中井積善）
- 156 秀吉濫刑 * 42 兩朝平攘録（前出、卷二）（按文―伊藤長胤）
- 157 侵掠三韓 * 114 東国通鑑（前出、卷三） 125 晋山世稿
- 158 援韓餉銀 * 61 武備志（前出、卷三） * 67 図書編（前出、卷三） 126 徳宗疏略（按文―伊藤長胤）
- 159 甲亥州 127 続字彙補（按文―伊藤長胤）
- 160 粥杖 * 93 日本風土記卷二時令（前出、卷三）（按文―醒齋）
- 161 翁鳴岐立票 （按文―青木敦書）
- 162 烏東家 128 海防纂要（按文―伊藤長胤・〔昌〕秀・佐藤成裕）
- 163 正平板論語集解 129 読書敏求記（錢曾）（按文―市野光彦）
- 164 倭綴 130 西域聞見録 131 大清会典
- 165 見林編録書目（欠）（註14）
- 右によれば、引用項目については、143 邪人国は邪久国に正されており、152 A 仏郎機は独自項目として記載されている。引用書は、新出のものは115と131の十七部、うち朝鮮書は120 123 125の三部。* 印前出のもの十部、うち中国書は64 52 5 7 67 42 61 93の八部、朝鮮書は88 114の二部。通計二十七部。

四 第三冊（卷五・六）の項目と引書

第三冊は卷五・卷六である。半葉一〇行・二〇字。卷五は六十五葉、卷六は四十九葉、計百十四葉。卷五は、はじめに「補異称日本伝料卷之五」とあり、まず引用項目を列記する。

- | | | |
|----------------|------------------|-----------|
| 166 唐鄭審則牒 | 167 武内大臣（※42紀武内） | 168 神功征新羅 |
| 169 襲 倭 | 170 野 若愚 | 171 鬱檀老拾遺 |
| 172 陸 海 | 173 楊貴妃祠 | 174 全唐詩逸 |
| 175 如意宝珠 | 176 鰻（鰻）魚 | 177 毘（毘）艸 |
| 178 菊池政則 | 179 寒川左馬允 A 宋素卿 | 180 倭（倭）刀 |
| 181 雙 刀歌 | 182 宋 濂 | 183 清 滝硯 |
| 184 造紙苔紙 | 185 殺青皮紙竹紙 | 186 細絹花布 |
| 187 桜（※127桜花） | 188 咏 柳 | 189 外国通書 |
| 190 尚朝平攘録（*42） | 191 美濃部金太夫 | 192 吉兵衛三郎 |
| 193 張 文相 | 194 倭扇（※125聚扇） | 195 五 絃琴 |
| 196 倭鉛（鉛） | 197 銅 錢 | 198 高 弁 |
| 199 接鮮紀事 | 200 省 吾 | 201 隠 元 |
| 202 大 馬頭 | 203 回 崎洋 | |

以上、166と203の三十八項目。副項目は179 Aの一項目。計三十九項目。このうち、187桜は127桜花（前出、卷三）と、ま

た194倭扇は195聚扇(前出、卷三)と、それぞれ同項目扱いをしてもよいとかんがえたが、いちおう項目名がちがっている。形式上、別扱いをした。190両朝平攘録[*42]としたのは、これは引用書としての42両朝両攘録(前出、卷二以下)のいみである。つぎに、本文にあたってみよう。

166唐明州刺史。(史)鄭審則牒 132鄭審則批判求法目錄。(録) (参考—故紹述文集)

167武内〔大臣〕(※42紀武内、参照) * 35宋史(前出、卷二) (按文—貝原好古・〔昌〕秀)

〔168神功征新羅〕 (参考—鳩巢小説)

169襲倭 * 1前漢書(前出、卷二) * 40晋書(前出、卷二) * 5唐書(前出、卷二) 133宋書 * 43南史(前出、

卷二) 134南齊書(参考—良山堂茶話)

170野若愚 135書史会要(参考—鷲峰集簡読耕)

〔171爵檀老拾遺〕 (按文—松下見林・小郭)

172陸海 136唐詩紀事 137唐詩品彙

174全唐詩逸跋。(翁広平) (註15)

173楊貴妃詞 * 84日東曲(前出、卷三) (参考—東行日録)

175如意宝珠 * 隋書(前出、卷二) (按文—貝原好古)

176鯁魚 * 3魏志倭人国伝(前出、卷二) * 30香祖筆〔記〕(前出、卷二) (按文—阿部温)

177鬯草。 138論衡(按文—滝沢解)

〔178菊池政則〕 (参考—菊池系図)

〔179寒川左馬允〕 (参考—南海通記卷六)

〔A 宋素卿〕 * 29 明史日本伝（前出、卷二）

180 倭刀 139 天功（工）開物・鍾鍛第十

181 日本雙刀歌馬子存叔賦（清・王昊） B 日本刀歌（清・陳恭尹）

182 宋濂 140 蘿山集 141 潛溪集 142 竜門集（参考―読耕集）

183 清澆研（硯） 143 九靈山房集（元・戴良）（按文―伊藤長胤）

C 日本硯銘（銘彙）

D 鳴澆石研（硯） * 143 九靈山房集（按文―栗田維良・〔昌〕秀）

E 清澆石硯 144 戴良集（按文―市川三亥）

184 苔使（紙） 145 七経孟子考文序（按文―市川三亥）

造紙（※78 紙、参照） * 139 天功（工）開物（前出、卷五）

185 殺青皮紙竹紙 * 139 天功（工）開物（前出、卷五）

186 細絹花布 146 大明一統志日本部（按文―源義和）

187 桜（※127 桜花） 147 全芳備祖（参考―羅山隨筆）

188 咏柳 * 100 徐氏筆精（前出、卷三）（按文―西島長孫）

〔189 外国通書〕

（参考―羅山林先生文集卷十四目錄・外国書下・同卷十二外国書上・遣大明国、同卷十三目錄・

外国書中、同卷十二目錄・外国書上、同卷十二外国書上・遣大明国、按文付）

190 兩朝平攘録 * 40 兩朝平攘録（前出、卷二）（一部引用、中断）

191 美濃部金大夫 * 40 兩朝平攘録（前出、卷二）

補異称日本伝の研究―石原

192 吉兵衛三郎 148 明実記 (按文)

193 張文相 (靖盗安辺以杜商患事、万曆四十七年) (按文—青木敦書) (註16)

194 倭扇 (※125 聚扇) 149 蓬窓談録 (按文—青木敦書)

195 五絃琴 * 109 文献通考 (前出、卷三) (按文—青木敦書)

196 倭鉛 * 139 天工開物 (前出、卷五) (按文—青木敦書・〔昌〕秀)

197 銅錢 150 宋元通鑑 151 元史 (按文—青木敦書)

198 高彝 (参考—先哲叢談後篇)

199 接鮮紀事

200 省吾 (参考—本朝高僧伝・護法漫筆)

201 隠元 152 福州志 (参考—墨談統編) (按文—〔昌〕秀) (註17)

202 大馬頭 (参考—福建漂流記)

203 回崎洋 (参考—福建漂流記)

以上、まず引用項目についていえば、目次と出入あるものは166 167 174の三項目、題目をしるさぬものは168 171 178の三項目、174 173は順序が前後している。引用書は132~152の二十一部が新出、* 印の35 1 40 5 43 83 65 3 30の九部が前出、計三十部。

巻五は右のとおりであるが、巻末につきの一文が書きそえてある(句読点は石原)。

右巻五、一冊嘗テ川口長祐ニ借り、小石川邸ノ火ニ罹レリ。故ニ今此一冊ヲ以テ巻五ノ闕ヲ補フ。天保壬辰六月

天保壬辰は三年、清の道光十二年（一八三二）にあたる。

卷六は、はじめに「修、異称日本伝料、第六」とあり、引用項目を列記する。

※74 太伯之後（前出、卷二）

204 孔子欲居九夷（※119 九夷）

205 鄭註孝經

206 肥後 火兎非谷

※66 阿蘇山（前出、卷一）

207 高瀬 達加什

208 八代 牙子子祿

209 天草 阿麻国撤

210 介 烏湖

211 山鹿 也望加

212 温井 郡

213 菊池 殿

214 源藤馬房

215 源 教信

216 大橋政重

217 河尻 開懷世利

218 博多花旭塔

219 僧義尹

220 仏光塔銘

※147 安寛（前出、卷四）

221 寰 中

222 秀 岩

223 如 瑤

224 加藤清正

225 松浦鎮信

226 中川秀政

※21 鄭芝竜（前出、卷二）

227 吾妻鏡

228 木下人

229 日本雜詠

230 餘 氏

※127 桜花（※187 桜）（前出、卷三・卷五）

※43 茶（前出、卷二）

231 扇（※125 倭扇、※194 聚扇）

232 香炉 香盒

233 沈門何氏

234 沈 南蘋

※198 高舜（前出、卷五）

225 清 曲子

以上、新出は204～235の三十二項目、前出※印は74 66 147 21 127 43 198の七項目、計三十九項目。つきに、本文について比較してみよう。

※74 太伯之後（前出、卷二）（按文―五井純禎）

204 九夷（※119 九夷―前出、卷三）（按文―雨森東）

205 鄭註孝經 * 35 宋史（前出、卷二）（按文―朝川鼎・龜田興・東条弘） 153 今文孝經說 154 孝經積疑

206 肥後 火兒・非谷 155 登壇必究 156 蒼霞艸 * 67 圖書編（前出、卷三） * 35 宋史（前出、卷二） * 61 武備志（前出、卷二） * 88 海東諸國記（前出、卷三）（按文―〔昌〕秀・井沢節）

出、卷二） * 88 海東諸國記（前出、卷三）（按文―〔昌〕秀・井沢節）

※66 阿蘇山火。（前出、卷二） * 64 北史倭國伝（前出、卷三）（按文―井沢節）

207 達加什 * 67 圖書編（前出、卷三）（按文―井沢節）

208 牙子子祿 * 67 圖書編（前出、卷三） * 156 蒼霞草（前出、卷六）（按文―井沢節）

209 阿麻国撒 * 155 登壇必究（前出、卷六） * 88 海東諸國記（前出、卷三）（按文―井沢節）

210 介烏湖 * 67 圖書編（前出、卷三） * 156 蒼霞草（前出、卷六）（按文―井沢節）

211 也望加 212 温井郡 213 菊池殿 214 源藤爲房 215 源教信 * 88 海東諸國記（前出、卷三）（按文―井沢節）

216 大橋政重（按文―井沢節）

217 開懷世利 * 67 圖書編（前出、卷三） * 156 蒼霞草（前出、卷六）（按文―井沢節）

218 花旭塔津 * 61 武備志（前出、卷二）（按文―小山朝樸）

219 義尹（参考―道元語録、按文―〔昌〕秀）

220 仏光禪師塔銘（掲俣斯撰并書、金岳桂篆）（参考―石載鎌倉志）

※147 安覚（前出、卷四） * 115 鶴林玉露（前出、卷四）（参考―霞亭沙筆・秉燭譚・文苑雜纂・筑前統風土記）

221 寰中歌（楚石梵琦） 157 楚石録（按文―井沢節）

227 秀岩和尚贊 * 157 楚石録 (前出、卷六)

223 僧如瑤 158 明政統宗 159 国朝典彙 * 67 図書編 (前出、卷三) 160 明高帝文集 (按文—松下見林・井沢節) (註18)

* 38 名山蔵 (前出、卷一)

224 (加藤) 清正 225 松浦鎮信 (按文—源君美)

226 中山秀政 (参考—藩翰譜、按文—〔昌〕秀)

※ 21 鄭芝竜 (前出、卷三) 161 三朝事略

227 吾妻鏡 228 木下人 162 外国竹枝詞

229 日本雜詠 * 98 日本雜詠 (十六首、沙起雲—前出、卷三)

230 餘氏 163 次餘東庵詩序 (朝鮮・洪滄浪)

※ 127 桜花 (前出、卷三) ※ 187 桜 (前出、卷五) (参考—大和本艸、按文—〔昌〕秀) 164 雜林唱和集卷四 165 湖亭涉筆

※ 43 茶 (前出、卷一) * 16 西齋詩〔話〕 (前出、卷二) (按文—佐々宗淳・〔昌〕秀)

231 扇 (※ 125 聚扇—前出、卷三 ※ 194 倭扇—前出、卷五) 166 蓬窓雜錄 (* 7 日録、* 95 続録、* 145 談録) 167 春風堂隨

筆 168 日本寄語 * 160 明太祖 (高帝) 文集 (前出、卷六) 169 王氏書苑 170 天水水山録 171 宣和奉使高麗図経

232 香炉香盒 * 108 遵生八牋 (前出、卷三) 172 文房器具箋

233 沈門何氏書 (書信一通)

(234 沈南蘋) 173 帰愚詩鈔餘集卷三・丹青引贈家南蘋

※ 198 高弁 (前出、卷五) * 173 帰愚詩鈔餘集卷五 (按文—〔昌〕秀)

235 清曲子 174 蓑笠両談

以上、引用項目の表記については、66 218 220 221 222 223 233 234 のように多少の出入がある。また引用書は、新出のもの 153 174 の二十二部、うち朝鮮書は 163 の一部、日本書は 164 165 174 の三部、* 印前出のものは 35 67 61 64 88 115 98 16 108 の九部、計三十一部。巻六の重出は * 印 156 155 160 173 の四部。

五 第四冊（巻七・八）の項目と引用書

第四冊は巻七・巻八である。半葉一〇行・行二〇字。巻七は三十六葉、巻八は五十葉、計八十六葉。

巻七は、はじめに「補異称日本伝巻之七」とあり、はじめて本書名と同一の表記をみる。引用項目はつぎのとおり。

236 天 王

※74 泰（太）伯之後（前出、巻二）

237 粟田真人

238 受 領

239 秦 王国

240 夷洲 澶洲

241 大 島

※66 阿蘇山（前出、巻二）

242 暹 朝鮮

243 函 本

244 挑剔作記

245 王二郎券書

246 徐 公直

247 僧 義空

248 尊 闍梨

249 僧 真寂

250 趙 度

251 法 滿

252 僧 無々

253 廖 公著

254 漆器（※46 漆）

※180 倭刀（前出、巻五）

255 松皮紙（※78 紙）

256 僧 惠藏

257 画 仏

258 外史引書 山本北山ノ外志ノ引用書目ナリ、今省キテ写サス

新出は236と258の二十三項目、※印前出は74 66 180の三項目、計二十六項目。258外史は山本北山の日本外志のこと（註19）。つきに、本文と比較しながら、引用書にもふれていく。

236 天王 * 60 続文献通考（前出、巻二） * 42 両朝平攘録（前出、巻二）

※74 泰（太）伯之後（前出、巻二）（按文―井沢節）

237 粟田真人 * 5〔新〕唐書日本伝（前出、巻二）（参考―続日本紀）

238 受領 175 日本受領之事一卷（参考―日本外史）

239 秦王国 * 65 隋書（前出、巻三）（按文―松下見林・白尾国柱・〔昌〕秀）

240 夷洲瀟洲 * 2 後漢書東夷伝（前出、巻二） 176 臨海水土志（沈瑩） 177 呉志（* 3 三国志）（按文―白尾国柱

・松下見林）

241 大島 178 職方外記（紀）

※66 阿蘇山（前出、巻二）（参考―高子観遊記）

242 暹朝鮮 179 袁中郎全集巻二・送劉都諫左遷遼東苑馬寺簿詩

243 図本 * 129 読書敏求記巻三・日本図纂一卷（前出、巻三）

244 挑剔作記 180 曆学疑問（参考―* 83 宋景濂日東曲）

〔245 王二郎券書〕成化甲辰（二十年（一四八四））春三月

246 徐公直 務（蘇）州衙前散騎將徐公直状上

〔247 僧義空〕 248 萼蘭梨（慧萼）（按文―〔昌〕秀）

〔249僧真寂 250趙度 251法滿 252僧無々 253廖公著〕 (梅尾高山寺藏古本)

254漆器(※46漆) 181清秘藏 182東西洋考 183高淡人集

※180倭刀(前出、卷五) * 181清秘藏 * 42西朝平攘録(前出、卷二)(註20)

255松皮紙 * 181清秘藏

256僧惠藏 184瓊臺会稿、董其昌卷八・跋万里一婦人卷(註21)

257画仏 185佩文齋書画譜卷十二

〔258外史(志)引書〕 欠

引用書は新出のもの175、185の十一部、*印前出は60 42 5 65 2 29 42の七部、計十八部。

卷八も、はじめに「補、異称日本伝卷之八」とある。引用項目はつぎのとおり。

259倭国有二 A東鯤

262武藏將軍

265秀頼逃薩摩

267不二偈

270蜀葵詩

273画扇(※194倭扇、※231扇)

276撒 葵

279婦人体臭 B団食 C鞆

260邪馬臺

263日光廟

※108直本尚書(前出、卷三)

268送喪鼓吹

271禦倭録

274日東篇(* 84日東曲)

277麻姑刺

280碎 器

261將軍三鬟

264若君

266逸孟子(※102孟子)

269寧波府諭周良

272雞卵巡撫

275紅繡毬

278開撲(樸)

281雙陸

282 鷓鴣

283 蓮花洋

284 松雲与清正書

285 朝鮮妄疏

286 情形可畏

287 鴨緑水

288 琉球經書

289 依魯花

290 毛人

291 一侍者

292 仁王經

293 平直庵

294 僧転智

引用項目は259と294の三十六項目、259 A・279 B Cの三項目は副。※印前出は108の一項目、計四十項目。つぎに本文と対照し、引用書にふれていこう。

259 倭国有二 A東鯤 186 禹貢錐旨(指)六

260 邪馬臺 * 3 魏志倭人伝(前出、卷一) * 2 後漢書東夷伝(前出、卷二) (按文―松下見林・〔昌〕秀)

261 將軍三饜 187 広見聞録(頭註に「乾隆十七年〔一七五二〕、嘉善徐季芳著」とあり)

265 秀頼逃薩摩 262 武藏將軍 188 湧幢小品卷三十(湖上朱国禎輯)倭官倭島

264 若君 263 日光廟 189 太。(大) 清太宗文皇帝実録卷五十九

※108 真本尚書(前出、卷三) * 109 文獻通考(前出、卷三) 卷百七十七・歐陽公日本刀歌 190 経義存亡考卷八十九

191 古書世学 * 34 十七史商榷(王鳴盛述)(前出、卷一)

266 逸孟子 (按文―〔昌〕秀)

267 不貳。価 * 187 広見聞録(前出、卷八) 192 異域志

268 送喪鼓吹 193 広東新語九(番禺屈大均)

269 (寧波府) 諭周良 嘉靖貳拾陸年(一五四七) 陸月初五日(按文―青木敦書・〔昌〕秀)

- 270 蜀葵詩 194 花史左編十二
- 271 皇明禦倭錄 195 緱山先生集卷五
- 272 雞卵巡撫 196 林居漫錄
- 273 画扇 (※194 倭扇、※231 扇) 197 鳳池吟稿卷七 (高郵江広洋朝宗父著)、題日本画扇応制 (按文—〔昌〕秀)
- 274 日東篇 (* 84 日東曲)
- 275 紅繡毬 198 学圃餘疏
- 276 撒羹 277 麻姑刺 278 開撲 (襖) 199 隨園補遺 (倉山居士)
- 279 婦人体臭 B 団食 C 鞞 * 10 癸辛雜識 (前出、卷一)
- 280 碎器 * 139 天工開物 (前出、卷五)
- 281 雙陸 200 雙譜 (宋・洪邁)
- 282 鷓 201 元真子中 (唐・張志和撰)
- 283 蓮花洋 202 定海臬志
- 284 松雲与清長。(正) 書 (参考—昆陽漫錄三)
- 285 朝鮮〔妄疏〕 203 懽園文集 (清・徐乾学) 卷十・斜朝鮮陪臣疏
- 286 情形可畏 * 189 大清世祖実録 (前出、卷八) 卷四十七・卷四十九
- 287 鴨綠水 * 171 宣和奉使高麗図経 (前出、卷六) 卷三
- 288 琉球経書 204 琉球国志略卷五 (翰林院侍講臣周煌恭輯)
- 289 琉球。依魯花 * 204 琉球国志略卷四・風俗

290 毛人 * 133 宋書(前出、卷五) 205 両山墨談

291 一侍者 206 無文印卷六・送一侍者帰日本序

292 仁王経 207 仁王護国般若経疏序(朝諸郎飛騎尉賜緋魚袋晁説之撰)

293 平親。衛直庵 208 教行録(四明行者)

[D 中浦居士]

294 僧転智 209 四朝聞見録甲集

以上、引用項目については265 262 264 263と順序がかわり、267 271 284 289 293に文字の出入と誤写(字)があり、293 D中浦居士がみえる。引用書については、新出は186と209の二十四部、*印前出は3 2 109 34 10 139 171 133の八部、計三十二部。巻八の重出*印は187 189の二部。

六 第五冊(巻九・一〇)の項目と引書

第五冊は巻九・巻一〇である。半葉一〇行・行二〇字。巻九は六十五葉、巻一〇は三十葉、計八十五葉。巻九は、はじめに「補異称日本伝料巻之九」とあり、つぎの引用項目を列記する。

295 東北限大山

296 女国 A 八丈島

※75 扶桑国(前出、巻二)

297 韓 中

298 利(和)歌弥多弗利(※142)

299 更国名

300 源 義植

301 源 義澄

302 源 義持

303 師東坡 B 題詠詩

304 康保五年詔

※85 湯和(前出、巻二) C 方鳴謙

305 官生来学

306 温 吉利

※86 劉采(前出、巻二)

307 楊維禎 D 項 (頁) 須

308 文 徵 明

309 徐 子 仁

310 長 夜 燈

311 秀 吉 (※156 秀吉濫刑、※59 豊臣書)

E 九重閣 F 兵六十万 G 算計 H 進女求封

312 嶋。津義久殺弟

313 福建回文

314 福建散文

315 竜涯興論割

316 東 照 宮

317 馬島買糧

318 馬島文物

319 朝鮮犯對馬

320 友 松

321 禁 異 教

322 弓

323 鎖 子 甲

324 琥 珀

325 錢

326 薰 炉

327 墨漆秘閣

328 摺疊剪刀

329 藤 花

※127 桜花 (前出、卷三)

330 僧鑿真 I 過海和尚

331 僧 最 澄

332 僧 梵 琦

333 王 積 翁

334 虎 丘 隆

335 紀伊三頭陀

336 三不丁襪

引用項目は295、336の四十二項目、副はA、Jの十項目、※印前出は75、85、86、127の四項目、計五十六項目。298利。歌弥多弗利は※142和歌弥多弗利(前出、卷四)のあやまりであろうが、項目、本文ともに利。とかいてあるので、索引の便をおもなばかって、あえて298の一項をたてた。つきに本文と比較しながら、引用書にもふれていく。

295 東北限大山 * 5 唐書日本伝 (前出、卷二) (按文―五井純禎)

296 女国 A 八丈島 * 2 後漢書東夷伝 (前出、卷二) * 109 文献通考四裔考 (前出、卷三) 210 太平御覽外国記 (按文

―松下見林・秋山章) 211 日觀要考 * 88 海東諸国記 (前出、卷三) (按文―秋山章・滝沢解)

※75 扶桑国 (前出、卷二) 212 夷俗考 (崑山方鳳)

297 韓中 * 188 湧幢小品(前出、卷八)

297' 倭錦 * 3 魏志(前出、卷二) (按文—曾占春)

298 利。(和) 歌弥多弗利(※142) * 65 隋書(前出、卷三) (按文—藤叔藏)

299 更国名 * 5 唐書(前出、卷二)

300 源義植 301 源義澄 302 源義持 * 38 名山藏(前出、卷二)

303 帥東坡 B 題詠詩 213 北。(青) 臆瑱語(明・余永麟) (按文—篁墩・吉資垣)

304 康保五年詔 214 金石錄(趙明誠德父) 卷三十

※85 湯和(前出、卷二) C 方鳴謙 * 38 名山藏(前出、卷二)

305 官生來学 * 60 続文献通考(前出、卷二) 五十五

306 溫吉利 215 女仙外史五十四回

※86 劉榮(前出、卷二) * 38 名山藏(前出、卷二) 劉安伝

307 楊維楨 D 頂。(項) 須 216 佩文(韻府) 一百一

308 文徵明 217 (寄園寄所寄引) 列伝朝詩集 * 38 名山藏(前出、卷二) 高道記

309 徐子仁 * 38 名山藏(前出、卷二) 芸妙記

310 長夜燈 218 平湖志

311 秀吉(※59 豊臣書、※156 秀吉濫刑) * 188 湧幢小品(前出、卷八) 卷三十 * 162 外国竹枝詞(長洲尤侗) (前出

卷六) * 182 東西洋考(前出、卷七) 219 明紀全載四十九 * 148 明夷紀(記) (* 124 皇明夷紀) (前出、卷四・

卷五) 二十 * 42 兩朝平攘録(前出、卷二)

E 秀吉造九重閣 * 29 明史 (前出、卷二)

F 関白兵六十万 G 関白算計 * 188 湧幢小品 (前出、卷八)

H 秀吉進女求封 220 焦氏說栝

312 嶋 (島) 津義久殺弟 * 42 (兩朝) 平攘録 (前出、卷二) (按文—〔昌〕秀)

313 (福建) 回文 万曆二十二年 (一五九四) 陸月日 221 征韓録

314 (福建) 檄文 万曆貳拾貳年 (一五九四) 陸月十二日 * 221 征韓録

315 (童涯興) 論割 万曆廿陸年 (一五九八) 柴月廿五日 * 221 征韓録 * 67 圖書編 (前出、卷三)

316 東照宮 * 219 明紀全載四十九 (前出、卷九) (按文—〔昌〕秀)

317 馬島質粮 318 馬島文物 319 朝鮮犯对馬 222 諛聞瑣録 (朝鮮書)

320 友松 223 本朝画史

321 禁異教 224 西湖志

322 弓 225 嶺外代答 (宋·周去非) 六

323 鎖子甲 226 嘯虹筆記

324 琥珀 * 19 格古要論 (前出、卷二)

325 錢 227 輿圖備攷 (明·潘先祖彙輯) 228 皇明象胥録 (茅瑞徵)

326 薰炉 327 黒漆秘閣 328 摺疊剪刀 (※180 倭刀) * 172 文房器具箋 (前出、卷六)

329 藤花 229 江外遊艸·藤花棚分賦 (沙起雲子雨)

※127 桜花 (前出、卷三) * 229 江外遊艸·春日携妓賞白桜桃 (按文—吉漢官)

330 僧鑒真 I 過海和尚 230 唐国史補

331 僧最澄 231 虞徳園集(明・虞淳熙)

332 「僧」梵琦 * 38 名山藏(前出、卷二) 方外記

333 王積翁 232 癸辛雜識後集(宋・弁陽老周密)

334 虎丘隆 233 快雪堂日記

〔335 紀伊三頭陀〕 欠

336 三不丁毬(参考—小琦録)

以上、引用項目では311 E F G H・313 314 315 332 に入出があり、335 は欠である。引用書は、新出は210〜233 の二十四部、うち朝鮮書は222 の一部、日本書は221 223 の二部。* 印前出は 5 2 109 188 3 65 38 60 162 182 148 42 29 67 19 172 の十六部、計四十部。巻九の重出は221 219 222 229 の四部。

巻十は、はじめに「補、異称日本伝料、巻之十」とあり、その下に「没後編録」とあるから、小宮山昌秀没後に、同学ないし後学によって編集されたことがしられる。ここには、つぎのような引用項目を列記する。

337 中米糙米楮賈

338 鮑 魚

339 川 芎

340 漢土古今ノ交渉

341 徐 福宮

342 踏 絵

引用項目は337〜342 の六項目。つぎに本文と比較し、引用書をみていこう(ナンバーは巻一からの通し、前出は初出のナンバー)。

337 中米糙米楮賈。(賈) (参考—朝鮮官職爵定名録)

338 鮑〔魚〕

339 川芎 * 61 武備志〔前出、卷二〕

〔340 漢土古今ノ交渉〕

234 雲笈七籤 * 93 日本風土記〔前出、卷三〕

* 138 論衡〔前出、卷五〕

235 史記

236 義楚六帖

237 歐陽〔文忠公全〕集 * 74 〔劉氏〕鴻書〔前出、卷三〕

238 杜詩分類集註

239 潛確類書 * 2

後漢書〔前出

卷二〕 * 3 魏志〔前出、卷二〕

* 64 北史〔前出、卷三〕

* 65 隋書〔前出、卷三〕

240 通典 * 41

梁書〔前出

卷二〕 * 109 〔文獻〕通考〔前出、卷二〕

* 40 晉書〔前出、卷二〕

* 133 宋書〔前出、卷五〕

* 43 南史〔前出

卷二〕 * 134 〔南〕齊書〔前出、卷五〕

241 新唐書

242 法苑珠林 * 5 〔旧〕唐書〔前出、卷二〕

* 35 宋史

〔前出、卷一〕

* 128 海防纂要〔前出、卷四〕

243 仏祖統記

244 宋高僧伝

245 文苑英華

246 玉海 * 208

教行録

〔前出、卷八〕 * 81 〔宋朝〕類苑〔前出、卷三〕

247 普燈録 * 151

元史〔前出、卷五〕

* 76 〔皇明〕通紀

〔前出、卷三〕 * 158 〔明正〕統宗〔前出、卷六〕

* 21 閩書〔前出、卷二〕

* 38 名山藏〔前出、卷二〕

* 67

圖書編〔前出、卷三〕 * 124 〔皇明〕実紀〔前出、卷四〕

248 明史嚀要 * 42 〔兩朝〕平攘録〔前出、卷二〕

〔註

22)

341 徐福宮

249 活所遺稿

342 踏絵

* 224 西湖志〔前出、卷九〕外紀二・卷四十八〔按文一吉田令世〕

以上、引用項目では337-338の三項目に出入、欠如がある。引用書では、新出は234と249の十七部、* 印前出は61-93-138

74-2-3-64-65-41-109-40-133-43-134-5-35-128-208-81-151-76-158-21-38-67-124-42-224の二十八部、計四十一部。

これで、補異称日本伝五冊十巻の項目・引用書について、ひととおり紹介したわけであるが、第五冊巻十の末尾に

つぎの識語がみえる。

補異称日本伝十卷、就小宮山氏原本、雇写生謄写、合装為五冊。

明治廿七年十一月 萩野由之識

すなわち、東大図書館本「補異称日本伝」の系統は、小宮山本—萩野本（転写）—東大本ということ、これによって明瞭である。

七 小 結

以上、六節にわたつてのべてきたことを要約すると、ほぼつぎのようになる。

一、東大図書館本、小宮山昌秀の補異称日本伝は五冊十卷、もと萩野由之博士が小宮山の原本を転写させたもの。すべて半葉一〇行・行二〇字。第一冊九十三葉、第二冊八十七葉、第三冊百十四葉、第四冊八十六葉、第五冊八十五葉、すべて四百六十五葉。冊巻別にまとめたのが「第一表」である。

二、本書編集の目的は、林春齋の本朝外攷（考）、松下見林の異称日本伝の補遺にあり、昌秀が「自後舶来書」も参看して集録した。ただし文化四年（一八〇七）の火災にあい、翌五年—嘉慶十三年（一八〇八）二月にいちおう完成したらしい。全卷のうち、巻五は川口長儒から借りていたが、小石川邸の火事で焼失し、天保壬辰—三年（一八三二）に補つたという。また、巻十は「没後編録」と註記があるから、昌秀が没した天保十一年（一八四〇）以後に、かがれが収集していた史料にもとづき、おそらく同学・後学の手によってまとめたものとおもう。

三、補異称日本伝という書名は、最終的につけたものであろうが、各巻を検索してみると、六つのがつ呼称を併用しているのが注目された。すなわち、1補異称日本伝とするもの（巻七・巻八）、2補異称日本伝料とするもの（巻五・巻九・巻一〇）、3補異称日本伝遺料とするもの（巻一）、4修異称日本伝料とするもの（巻三・巻六）、5

[第一表] [第三表]

冊	卷	葉	引 用 項 目				引 用 書		
			No.	※前出	新 出	計	* 前出	新 出	計
I	1	51	1~66	0	66(71)	66(71)	0	38(K2)	38(K2)
	2	42	67~104	2	38	40	8	25	33
		93		2	104(109)	106(111)	8	63(K2)	71(K2)
II	3	49	105~141	2	39(47)	41(49)	12	52(K4, J1)	64 (K4, J1)
	4	38	142~164	1	25(27)	26(28)	10(K2)	17(K3)	27(K5)
		87		3	64(74)	67(77)	22(K2)	69(K7, J1)	91 (K9, J1)
III	5	65	165~203	0	38(39)	38(39)	9	21	30
	6	49	204~235	7	32	39	9	22(K1, J3)	3 (K1, J3)
		114		7	70(71)	77(78)	18	43(K1, J3)	61 (K1, J3)
IV	7	36	236~258	3	23	26	7	11	18
	8	50	259~294	1	36(39)	37(40)	8	24	32
		86		4	59(62)	63(66)	15	35	50
V	9	65	295~336	4	42(52)	46(56)	16	24(K1, J2)	40 (K1, J2)
	10	30	337~342	0	6	6	28	17	45
		85		4	48(58)	52(62)	44	41(K1, J2)	85 (K1, J2)
5	10	465		20	345(374)	365(394)	107(K2)	251(K11, J6)	358(K13, J6)

(Kは朝鮮書, Jは日本書)

[第二表]

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	巻
59と同じ	5と同じ	7と同じ	補異称日本伝	3と同じ	補異称日本伝料	補異称日本伝料	修異称日本伝料	修異称日本伝補料	補異称日本伝遺料	呼称

△修異称日本伝補料とするもの(巻二)、6修補異称日本伝料とするもの(巻四)である。これを表示したのが「第二表」である。

四、異称日本伝以下の類書統編は、その体裁はおおむね引〔用〕書を中心に編集しているが、本書は引用項目を中心に編集しているのが特色である。すなわち、各巻のはじめに引用項目を列記し、本文にはその出典、典拠になる中国書・朝鮮書・日本書を引用している。評論的な関係日本書も多く収録している。因みに、本稿の目的は、中国書・朝鮮書にあるので、日本書は多く割受したが、それでも原史料の価値あるもの六部をあげておいた。また「参考」「按文」などの名目をたてたのも右の欠を補うためにほかならぬ。引用項目の数を正確にきめることはむずかしいが小さく註記されているものを、いちおう副項目としてABC…としてあつかった。その結果は、第一冊の新出項目は一〇四(一〇九)、※印の前出項目は二、計一〇六(一一一)であり、以下、第二冊は新出六四(七四)、※前出三、計六七(七七)第三冊は新出七〇(七一)、※前出七、計七七(七八)、第四冊は新出五九(六二)※前出四、計六三(六六)、第五冊は新出四八(五八)、※前出四、計五二(六二)通計新出三四五(三七四)、※前出二〇、総計三六五(三九四)ということになる。

五、引用書も、右に準じて数えてみると、第一冊の新出引書は六三(朝鮮書二) *印の前出引書は八、計七一(朝鮮書二)、以下、第二冊は新出六九(朝鮮書七、

日本書一）、*前出二二（朝鮮書二）、計九一（朝鮮書九・日本書一）、第三冊は新出四三（朝鮮書一・日本書三）*前出一八、計六一（朝鮮書一・日本書一）、第四冊は新出三五、*前出一五、計五〇、第五冊は新出四一（朝鮮書一・日本書二）、*前出四四、計八五（朝鮮書一・日本書二）、通計新出二五一（朝鮮書一一・日本書六）、*前出一〇七（朝鮮書二）、総計三五八（朝鮮書一三・日本書六）ということになる。引用項目・引用書部数について、各冊各巻別に表示したのが〔第三表〕である（項目および引書ナンバーは石原加筆）。

六、いずれにせよ、これらの作業は、常時の注意配慮を丹念につみかさねたもので、その勤労はまことに貴重である。わたくしも本書を調査整理しながら、多くを学ぶことができ、先学の学恩にふかく感謝している。ただ難をいえば、新着想の項目主義も、その選択に不十分、ないし不適當なものがあり、主旨がよく生かされているとはいえない。たとえば、※印の重出する項目は二十におよぶが、未整理である。項目のえらびかたも、類似・近接のものを一本にまとめるような配慮も不十分である。萩野博士が、本写本の巻頭に「此書重テ整理類聚スヘシ」とし、国号・地理・風俗・人物・器財・動植・聘使・戦斗・僧尼・文芸・書信など、具体的な分類項目十一をメモしておられるのは卓見である。端的にいえば、本書の「索引」をつくるという作業にもつながるが、これは後稿にまたねばならぬ。

七、引用書の引用のしかたについても、不正確・不十分のそしりをまぬかれない。なかには、正確・懇切なものもあるが、著者・書名・冊巻・年月をはじめ、原史料の内容そのものにも、安心して孫引きできぬものもある。また「雇写生騰写」させた関係もあろうが、転写のさいの誤脱・誤入・誤字も、かなりあるようである。さらにこの中には、小宮山昌秀自身の誤解・誤認・誤記や省略・割愛もあり、ケアレス・ミスチックもあるようにおもう。

なお、本書の冊巻検索用として「補異称日本伝引用項目・引用書五十音順一覧表」を作成したが、紙数の関係で省略した。もとより、わたくしの『異称日本伝の類書統編の研究』の総合索引の一部である。

補註

(1) 東大図書館蔵、小宮山昌秀(楓軒)の補異称日本伝(写本、五册十卷)の架号はG二九一九九一。

(2) 関儀一郎・義直編、近世漢学者著述目録大成(東洋図書館刊行会、昭和一六年四月)には、小宮山楓軒の著述として、異称日本伝補遺一卷をかかげる(二一五頁、下)。また国会図書館蔵の小宮山叢書(六〇八册)には、昌秀の著として異称日本伝拾遺二册、異称日本伝補遺一册がみえる。なお、岩波の国書総目録、第一卷(一八三—一八四頁)、第三卷(五六六頁)、参照。石原道博、撰者不詳の異称日本伝補遺について、日本歴史二七五、一九七二年四月。

(3) 石原道博、内閣文庫蔵の国史外考と本朝外考について、茨城大学人文学部紀要・文学科論集三、一九六九年一二月。

(4) 周密の癸辛雜識にみえる日本僧定心については、石原道博、日中交渉史雑考、茨城大学人文学部紀要・文学科論集二、一九六八年二月。補異称日本伝巻一に引用されている記述は「定心姓平、日本国京東路相州、行香県、上守郷、光勝寺僧也」となっている。なお、註(5)参照。

(5) 威繼光にかんする記事は、謝肇淛の五雜俎巻五にみえる。石原道博、壬辰丁酉倭乱と威繼光の新法、朝鮮学報三七・三八、一九六六年一月、参照。なお、補異称日本伝巻一の引用項目、34威繼光と35仙香(返魂)のあいだに、まえにのべた僧定心(癸辛雜識)の記事が引用されている。註(4)に引用した部分を、この五雜俎とくらべてみると、「其僧姓平氏、日本国京東相州行香県上守郷、元勝寺僧也」となっている。

(6) 杭世駿の榕城詩話にみえる光餅というのは、註(5)にみえる威繼光が、いわゆる禦倭のとき、軍中であたえた行糧である。

(7) 補異称日本伝巻一にみえる寿安鎮国山については、阿蘇山説とこれを否定する薩摩の駑馬岳(ノタノタケ)説とを併記しているのが注目される。わたくしは、阿蘇山説を否定し、京畿説をとっているが、駑馬岳説も傾聴にあたいするとおもう。別稿にゆずる。石原道博、日明通交貿易をめぐる日本観、茨城大学文理学部紀要・人文科学五、一九五五年三月。なお、註(11)参照。

(8) 補異称日本伝にひく嗜哩嘛哈の記事は、つぎのとおり。

洪武初。(明国高帝初時、欲正)倭国〔彼〕遣使臣嗜哩嘛哈入貢〔奉表乞降〕。上問其国風俗如何。答〔嗜哩嘛哈〕以詩〔答〕云、国北(比)中原国、人同(加)上土(古)人、衣冠唐制度、礼樂漢。(漢)君臣、銀甃(瓮)簞(菊)薪(新)酒、金刀膾細(錦)鱗、年々二三(三三)月、桃李一般春。上初怒〔欲罪〕其〔不恭〕慢徐乃責之。 堅瓠秘(五)集・遵聞

なお、前出、石原道博、日中交渉史雑考、参照。後出、註(18)参照。

- (9) 補異称日本伝卷三にひく「求通表文」というのは、いわゆる「日本国良懷贈洪武帝書」のことである。これについては、明史「稿」日本伝・剪勝野文・劉氏鴻書・日本風土記(日本考)・日本一鑑・殊域周咨録・明紀および異称日本伝などを検索して発表したことがある。石原道博、いわゆる良懷の対明答書について、歴史研究三一、一九六四年三月。補異称日本伝では、剪勝野文のものをしるし、「劉氏鴻書引同書」とあり、また、はじめに傍書して「明志載日本国良懷贈洪武帝書」、また「名山藏作日本三率亟相書不遜、其文曰」として加筆している。字句の異同については、すでに拙稿でいおう検討済みであるが、名山藏引のものもふくめて、再検討する必要がある。なお注目すべきは、小宮山昌秀の按文で「秀按、是恐元宋人擬作」とあるが、すでに正史の明史「稿」日本伝にもせてあり、擬作と断ずる根拠がつまびらかでない。

- (10) ここでは「草木子に見ゆ」として、韓山童の「取精兵於日本」、陳宜中の「走倭」のことがみえる。宋末に張世傑が海外某国に借兵し、陳宜中が占城に借兵したことは黄宗義も言及しているが、「陳宜中走倭」のことなどもふくめて、別稿にゆずる。

- (11) 補異称日本伝卷三には、寿安鎮国山について、藤「井」貞幹の与栗山書・正字通・異称日本伝・西遊記などをひき、阿蘇山説を紹介している。註(7)参照。

- (12) 「無馬」の引用書として、小宮山昌秀は「後漢書倭人伝」をあげ、その下に「魏志同文」と、小さくそえがきしているが歴史的資料として引用するならば、年代は前後するが、逆に「魏志倭人伝」をさきにあげ、その下に「後漢書同文」とすべきであろう。

- (13) 倭志に「高帝初遣使臣趙秩、諭降之僧祖朝来貢方物」とみえ、補異称日本伝の撰者小宮山昌秀も、この文の頭註(小見出し)に「僧祖朝」としるしているが、太祖実録には「僧祖来」とあるから、「朝」は誤入とおもう。なお、明史紀事本末も「祖来」とし、辻善之助博士もこれを正しいとされているが、わたくしは賛成しない。「祖来」が正しいとおもう。石原道博、日明交渉の開始と不征国日本の成立、茨城大学文理学部紀要・人文科学四、一九五四年三月、二七頁、参照。

- (14) 「見林編録書目」は、引用項目のところで、小宮山昌秀が「異称日本伝ノ引用書ナリ、今省ク」としているのとおり、本文にも省略されている。松下見林が「異称日本伝」を撰したのは画期的なことであり、その類書・続編もすくなくない。本稿もむろんその研究の一環である。異称日本伝の引用書については、石原道博、中国史書日本関係記事の集録について、

山崎先生退官記念東洋史学論集、一九六七年一月、参照。

- (15) 全唐詩逸三冊は「日本国河世寧所輯」であるが、道光三年（一八二三）、その跋をかいたのが翁広平である。広平は、このなかで、山井神鼎の七経孟子考文、物茂卿の弁名二卷・論語徵十卷、林羅山の補群書治要三卷、天瀑山人の佚存叢書五集、熊版邦・熊版秀の南遊稻載録・戎亥遊囊、西川朔の蓬蒿詩集などをあげ、「日本之文字、固非海外他邦所可並也」と称揚している。なお、翁広平の撰した吾妻鏡補（一名日本国志）については、静嘉堂文庫本にもとづき、昭和十三年（一九三八）、学界に紹介したことがある。石原道博、鎖国時代における清人の日本研究—翁広平の日本国志について（上・下）、茨城大学文学部紀要・人文科学一六・一七、一九六五年一月—一九六六年二月。

- (16) これは中軍官董伯起らを送回することに関するもので、文中に「將軍様」という表現をつかっている。万曆四十七年は元和五年（一六一九）。董伯起については、石原道博、倭寇の温情について、日本歴史一六六、一九六二年四月。同、倭寇、吉川弘文館、一九六四年四月、一四二頁、参照。

- (17) 隠元と題してはいるが、じつは独立・隠元・朱舜水の三人のことにふれ、昌秀の按文もふくめて、もっぱら舜水についてべる。引用項目名は「独立・隠元・舜水」とするか、むしろ「朱舜水」とあらためた方がよさそうである。

- (18) 補異称日本伝巻六の「僧如瑤」の項目には、明政統宗・国朝典彙・図書編・明高〔皇〕帝文集から関係記事を引用したあと、按文として、松下見林の異称日本伝の文をあげ、つづいて井沢節の菊池伝記の文をひく（句読点は石原）。

井沢節曰、応安四年（一三七二）、菊池武政、懷良親土ノ命ヲ奉シ、故例ヲ温子（ネ）隣好ヲモトメテ、使僧如瑤藏ノ主ヲ大明ニ遣シケルニ、高皇帝、使僧ニ対面セ／＼ラレ、日本ノ風俗ヲ問レケルニ、彼僧、詩ヲ賦シテ／＼コタヘケル。国比中原国、人如上国人、衣冠唐制度、礼樂漢君ノ臣。銀甕籩新酒、金刀膾錦鱗、年々二三月、桃李一般春。

高皇帝、甚歎感アリシトナン。 菊池伝記

註（8）参照。なお、嗜哩・嘛哈は武政の訛伝かもしれぬ。

- (19) 山本北山（信有）の日本外志については、石原道博、日本外志の写本四種について、茨城大学人文学部紀要・文学科論集四、一九七〇年一月。

- (20) 「倭刀」については、第三冊巻五・第四冊巻七にみえる。石原道博、日本刀歌七種—中国における日本観の一面、茨城大学文学部紀要・人文科学一一、一九六〇年一月。同、倭寇、吉川弘文館（前出）、一五—二六頁、参照。

- (21) 万里一婦人巻については、隣好徵書・国史外考・日本外志・補異称日本伝などに、それぞれ記事があるが、別稿にゆず

る。なお、石原道博、明代日本観の一側面、茨城大学人文学部紀要・文学科論集一、一九六八年一月。同、内閣文庫蔵の国史外考と本朝外考について（前出）、参照。

(22)

小宮山昌秀編するところの、いわゆる「漢土古今ノ交渉」というのは、神代（黄帝）から寛永元年（天啓四年）までの日中交渉を編年的に記述したものであるが、これについては別稿にゆずる。